

■出演者

コンサートマスター

三溝 健一

第1ヴァイオリン

上野 圭子
加藤 由香里
小菅 宏造
坂口 和代
杉山 晴生
洲崎 匡
田村 さやか
橋本 士郎
岩田 貴守＊
近藤 将弘＊
田中 陽子＊
八國生 紗也乃＊

第2ヴァイオリン

青木 由美子
泉 紀子
高松 理恵
田中 教生
平原 良晃
藤原 満
水谷 怜
吉村 理
石津 忠＊
本間 久貴＊

ヴィオラ

稲田 由佳
清水 哉子
惣塚 弘
古海 法雲
渡辺 みほ
大熊 はるか＊
樫出 百香＊
寺島 希容子＊
宮入 徹＊
横田 裕祐＊

チェロ

稲井 進
上野 敦子
大坪 美樹
笠野 恭子
佐藤 慎悟
佐藤 充
高橋 文子
水澤 由紀

コントラバス

秋山 雅央
吉崎 須賀子
渡辺 光
松原 直之＊
山崎 康正＊

フルート

木村 千尋
齊藤 孝久
福田 幸久
丸山 恵理
森澤 拓

オーボエ

羽賀 純子
橋本 直子
皆川 正弘
皆川 未央

クラリネット

伊藤 志帆
齊藤 直美
鈴木 和久
富田 洋加

ファゴット

福嶋 梓
宮口 弘明

ホルン

笹川 修一
島岡 美沙
須田 孝義
森 真人
綿貫 英紀

トランペット

杉山 さくら
菅野 徳嗣
中原 美千佳
水澤 学

トロンボーン

笠野 光雄
松田 彰英
岡寺 広明＊
橋爪 智哲＊

テューバ

白水 誉哲

パーカッション

稲田 善智
中原 健二＊
阿部 真代＊
藤澤 紀章＊
綿貫 佳子＊

ピアノ

稲田 由佳

＊は賛助出演ならびに団友

■次回演奏会のご案内

第71回定期演奏会

日時：2013年9月16日(月・祝)14:00開演

会場：上越文化会館 大ホール

曲目：ベートーヴェン／「フィデリオ」序曲

ブルッフ／ヴァイオリン協奏曲 第1番(独奏：牧田由起)

ドヴォルザーク／交響曲第9番「新世界より」

■団員募集のご案内

上越交響楽団では団員を募集しております。

通常オーケストラで演奏される楽器であれば、どなたでも入団できます。

素敵で愉快的仲間達と素晴らしい音楽を創りましょう。

団員一同心より歓迎いたします。

連絡先 Mail: mako2034@joetsu.ne.jp Tel: 090-1606-1254(茨木)
ホームページ <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~jsovn/>

上越交響楽団 第70回定期演奏会

2013年3.2^① 開演18:30
上越文化会館大ホール

■主 催／上越交響楽団

■後 援／上越市教育委員会

Joetsu Symphony Orchestra

ごあいさつ

本日は上越交響楽団の演奏会にお越し下さいまして、真にありがとうございます。半年に一回のペースで定期演奏会や特別演奏会を行っていたら41年、70回の定期演奏会になりました。

毎回、どんな曲を演奏しようかと皆で考えて、自分たちのやりたい曲、お客さんに喜んでもらえる曲、ちょっと高望みな曲、楽器編成は大丈夫だろうか、特殊楽器はどうだろうか、奏者はいるだろうか、半年の練習で間に合うだろうか・・・等。身の丈のちょっと上くらいの曲だと、半年の練習が楽しくなります。わくわくしてきます。一週間に一度の練習が待ち遠しくなって、少しは自主練習して皆に迷惑かけないようにしないとね。足引っ張りたくないからね。練習しないと音が輝いて来ないからね。本番で震えずに曲の中にのめり込んでいくと心の底から感動で震えてきて。

世の中は色々な事件や悲しい事や、時には楽しい事でいっぱいですが、今日は私達の精一杯の無二の世界です。どうか一緒に楽しんで下さい。いつも有難うございます。

上越交響楽団 団長 古海法雲

指揮者

Hasegawa Masanori 長谷川 正規

東京藝術大学音楽学部器楽科にてチューバを専攻。学部在学中に安宅賞を受賞。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。

ソリストとして、松尾葉子指揮藝大フィルハーモニア、故岩城宏之指揮オーケストラアンサンブル・金沢とR.V.ウイリアムスのチューバ協奏曲を共演した。チューバ奏者として管弦楽・吹奏楽・室内楽の領域で活動する傍ら、オーケストラを指揮する機会も増えてきており、上越交響楽団指揮者、新潟市・北区フィルハーモニー管弦楽団音楽監督を務めている。2010年上越文化会館での創作音楽劇「くびき野の歌」、2012年北区オリジナルミュージカル「春のホテル」などの舞台音楽も指揮した。現在、上越教育大学大学院学校教育学研究科専任講師。



コンサートマスター

Samizo Ken-ichi 三溝 健一

長野県松本市出身。4歳よりヴァイオリンを始め、正岡紘子、天満敦子、山岡耕作の各氏にヴァイオリンを、東京音楽大学にて井上將興氏にヴァイオリン及び室内楽を師事。また、肥沼きよ、竹内邦光、松本紀久雄、丸山嘉夫、汐澤安彦の各氏にピアノ、ソルフェージュ、音楽学、指揮法を師事する。学生時代から様々な分野での演奏活動始めるが、殊に室内楽では「ENSEMBLE藝弦」(弦楽合奏)と「室内楽“EAU”」(ピアノアンサンブル)を中心とした活動において研鑽を積み、現在は「音泉室内合奏団」を中心に演奏活動を展開している。ソロ、室内楽、オーケストラ、オペラ等の演奏活動に加えて、関東甲信越各地の市民・学生オーケストラにおいて指導者として活動の発展に尽力、また初心者から専門課程の学生及び演奏家まで幅広く後進の育成にもあたっているほか、編曲も多数手掛けている。足立シティオーケストラ／常任コンサートマスター・副指揮者。松本交響楽団／客演コンサートマスター・副指揮者。上越交響楽団、柏崎フィルハーモニー管弦楽団、他／コンサートマスター・トレーナー。音泉室内合奏団／ソロ・コンサートマスター・音楽監督。池袋音楽学院講師。“Gruppo Violini”主任講師。



楽団紹介

1972年(昭和47年)結成。毎年2回開催している定期演奏会、各方面からの依頼演奏や行事への参加を通じて広く市民に愛されています。

上越市を中心に県内各地から音楽を愛する仲間が集い、質と達成度の高い音楽を表現すべく、様々な楽曲に挑戦しています。

2006年「新しい上越市民の歌とベートーヴェン『第九』を歌う集い」にて、上越市出身の指揮者、汐澤安彦氏と共演。2010年、上越文化会館30周年記念事業「くびき野の歌」に参加、好評を博しました。

現在は指揮者に上越教育大学の長谷川正規氏、コンサートマスターに三溝健一氏を迎え、充実した活動を展開しています。



プログラム&曲目解説

■モーツァルト／歌劇「魔笛」K.620 から序曲

Wolfgang Amadeus Mozart / Die Zauberflöte, K.620 Ouverture

オペラがイタリア語で演じられるのが主流であった当時の音楽界において、モーツァルトはドイツ語で演じる歌芝居を大成させて、後にワーグナーへと続くドイツオペラの基礎を築きました。その最高傑作が1791年に初演された「魔笛」です。この作品は架空の時代のエジプトを舞台に、王子タミーノが試練をくり抜け、悪者ザラストロの支配する世界で、恋人パミーナと結ばれるまでが描かれたメルヘン的な話です。さらに、モーツァルトが加盟していた友愛結社フリーメイソンの思想の影響により、音楽には精神的な深みが加わっています。序曲は荘厳な和音を3回奏して開始され、生き生きとしたソナタ形式の主部へ進んでいきます。

■グリーグ／「ペール・ギュント」第1組曲 作品46、第2組曲 作品55

Edvard Grieg / “Peer Gynt” Suite No.1, Op. 46 & Suite No.2, Op. 55

ノルウェーの文豪イブセンから同郷人であるグリーグが依頼を受け、詩劇「ペール・ギュント」上演のために作曲した劇音楽です。組曲は全27曲ある劇音楽の中から演奏会用に編集されたものです。物語は、夢想家で好色家のペール・ギュントが世界を旅し、年老いて帰郷するまでの波乱万丈な人生のお話です。今日は第1および第2組曲を物語に合わせ並べ替えて演奏します。

- イングリッドの嘆き
ペールは母親のオーセと二人暮らしでしたが、怠けて働きもせず空想ばかりめがらせていました。ペールは元彼女で資産家の娘イングリッドが結婚すると聞き、いきなり結婚式に乱入しイングリッドをさらいます。滅茶苦茶な話ですが、実はイングリッドもペールに心が残っていてペールを受け入れます。ところがペールはすぐに飽き、彼女から離れてしまいます。彼女はペールを恨みながら町に戻ります。
- 山の魔王の宮殿にて
町から逃げたペールは山奥に迷い込み、魔物たちに出会います。なんとペールは魔王の娘を妻に迎え、自分が魔王になろうとしますが、魔王から脅迫され追われながら命からがら逃げ出します。
さらにペールは、結婚式のイングリッド略奪の途中で、農家の娘であるソルヴェイグという純情な女性に出会い口説いていたのです。ソルヴェイグはペールを拒んでいましたが、やがて森にある彼の小屋と一緒に暮らすようになります。しかし、魔王の娘にも追われるようになり、ソルヴェイグを残して去っていきます。
- オーセの死
町に逃げ帰ると、母オーセは死の淵にありました。母はペールの空想話を聞き微笑みながら亡くなります。
- 朝
ペールは心機一転アフリカに渡り、モロッコの海岸で清々しい朝を迎えます。そして奴隷貿易の事業に成功しますが、財産を積んだヨットを奪われ砂漠に置き去りにされます。
- アラビアの踊り ●アニトラの踊り
無一文になったペールは、砂漠で盗賊が隠していた服と馬を見つけアラビアの預言者に成ります。そこでアラビア遊牧民の酋長の娘アニトラに誘惑されます。彼はアニトラと駆け落ちを試みますが、結局はアニトラに騙され財産を奪われ、再び砂漠に捨てられます。
- ペール・ギュントの帰郷 ～ ソルヴェイグの歌
それからもペールは数々の冒険を繰り返し、カリフォルニアで再び巨万の富をなしました。しかし、年老いてから財産と共に故郷に帰ろうとする途中で船が嵐で難破し、再び無一文になってしまいました。
彼は意気消沈し帰郷しますが、でたらめな人生を過ごす間、故郷ではソルヴェイグがひたすらペールを待ち続けていました。ソルヴェイグは年をとる盲目になっていましたが、ペールを許し子唄を歌います。そしてペールはソルヴェイグの膝の上で安らかに息を引きとり、波乱万丈の生涯を終えました。

■ 休憩 ■

■シューマン／交響曲第3番 変ホ長調 作品97 「ライン」

Robert Alexander Schumann / Symphonie Nr.3 Es-dur op.97 “Rheinische”

シューマンの交響曲は4曲ありますが、作曲順からすると第3番が最後の交響曲で「ライン」の通称があります。シューマンは1840年代にドレスデンで活躍していましたが、フランス革命の影響による政情不安や精神疾患の悪化から、デュッセルドルフ市より楽長として招かれたことをきっかけに1850年に転居しました。ライン河畔のデュッセルドルフの美しい自然や快活な人々との交流により、気を良くして作曲されたのが第3交響曲で、シューマンが「ライン河でのくらし」と呼んだとされています。特に、自身が「ラインの朝」と名づけたこともある第2楽章にはライン流域の民謡が引用されていたり、「壮麗に」と記された第4楽章は近郊のケルン大聖堂の感銘であったり、第5楽章がデュッセルドルフの謝肉祭の様子を表していたりするように、ライン地方の印象を色濃く反映して、シューマン後期の作品としては珍しく明るい雰囲気を持っています。

全5楽章に分けられていますが、第4楽章が終楽章に対する長大な序奏部の役割をしていることから、4楽章構成と見なすこともできます。

第1楽章：生き生きと
第2楽章：スケルツォ、極めて穏やかに
第3楽章：速くなく
第4楽章：壮麗に
第5楽章：生き生きと